S-3

新村出と言語理論

定延利之

1. はじめに

新村出先生（以下「新村」）の研究は語史を中心とするものだったが，新しい現代言語学を担う人材が新村のもとで多く育ったのは，新村の言語観察に「ゆたかに暗示的なもの」（泉井1971）があったからだろう。その「暗示」は後継世代によって解明し尽くされたわけではなく，今なお「暗示的なもの」たり得ているように思われる。ここではその一例として，文法的な数に関して，我々に残された観察を紹介し，そこから考えられることを述べてみたい。

2. 文法的な数に関する新村(1954)の観察

文法的な数に関して，我々の前には(1)～(3)のような新村(1954)の観察が残されている。

(1) 即ち世界に行われる言語の中には，単数に対して複数，複数に対して単数を常に予想しなければならない文法の現象を有するものと，特にこの区別を必要とせず，却って数の現象或はその観念には本来文法的に無関心な日本語，シナ語の如きものがある。一方は常に数の意識を有するに対して他方はこれに有しないのを原則としている。ただ算えることは吾々の智的乃至実生活に重大なる関係を有し，数の観念そのものとその表現は極めて合理的な現象であるから，必要のある場合は，本来吾人の生れながらにして承けた言語の文法現象の一つとして「数」が存在しない場合にも，他の論理的合理的な手段を以てこれを表現することがある。［p. 96］

(2) ……数の区別を本来の現象とする言語にあっても，単複の区別がしかく合理的にのみ行われているのではない。曽ては合理的であったものが単なる伝統として言語活動中に残存し，微弱なる作用を及ぼしていることもあれば，新しく一の言語意識中に起こった観念の変化と共に他よりしては不合理と見られるものが，その言語にあっては第一義的な文法現象として活力を増進してゆく場合もある。言語は合理的存在でもなく，論理的体系でもない。［pp. 96-97］

(3) 数の現象に階級或はクラスの意識が干渉する現象は，語形に「数」が共生する自律語の外にはよく見受けられ，インドのドラヴィダ，アフリカのバントゥはクラスによって複数の作り方が異り，アメリカのあるものには（シウアン語，Siouan）生物にしか複数をみとめないものがある。日本語の複数的構成法も，無性物から有性物，微小物から大形のものに至るに従って複数的表現法が次第に明瞭になり，同時に精緻になって来るのは事実である。また以上の助辞の外にマレー語と同じく助数詞（=人，=尾，=頭）を有する日本語には，クラスの観念の最も明白なあらわれがある。［pp. 99-100］

まず(1)では，世界の諸言語が大きく二分され，日本語は中国語と共に，数の区別に積極的でない言語と位置付けられている。それと同時に，文法的な数が人間の数える能力と明確に区別されている。また(2)では，言語が数の区別に積極的だからといって合理的・論理的とは言えず，そもそも人間の言語は純粋な「合理的存在」「論理的体系」ではないと述べられている。さらに(3)では，各言語において数の区別がある領域と無い領域の違いに注意が向けられ，その関連で助数詞に触れられている。この時代，先進的な日本語研究の中でも「英語と違って日本語は助数詞が豊富で不便。廃止すべきではないか」といった論があったことを考えると，これらの観察はさらに意義深いものに感じられる。

上の(3)で「無性物から有性物」とされ，また次の(4)で「細かい無生物に複数を与えない」とも述べられていることからすると，新村は日本語における数の区別の有無にアニマシー（モノが「生きている」とイメージされる程度）の高低が関わっているという認識を，既に持っていたのだろう。

(4)　日本語の文法は概して細かい無生物に複数を与えないということができる。[p. 98]

だが，普遍文法への疑念によるか否かはともかく（cf.　斉木・鷲尾 2012），その認識が言語一般に向けられることは無かった。階層の意識を思わせる記述がある程度である（(5)）。

(5)　……何れまでを単数［ママ］の区別を設くる限界とし，何れ以下或は以上を単に単複の何れかのみを以て表現すべしとするかは，当該言語自らの表象圏の相違によって相違するが故に一概に断定し去ることはできない。[p. 97]

3.　言語一般の数の区別とアニマシー階層：わかってきたこととわからないこと

現在では，まさに(5)の認識と合致する形で，言語一般の数とアニマシーとの関わりが認められている。クロフトは，世界の諸言語を見渡すと，アニマシーの階層上のいずれかの位置に境界線を持ち，その境界線よりもアニマシーが高いものについては，単数形と複数形が必ず異なるが，その境界線よりも低くアニマシーが低いものについては単数形と複数形は必ずしも異ならないという言語が多いという（Croft 1990）。

ここで重要なのは，諸言語の実態に合わせたクロフトのアニマシーの階層が，「本来的なアニマシー（人間>動物>植物等）」だけでなく，「人称のアニマシー（1 人称・2 人称>3 人称）」「名詞類のアニマシー（代名詞>名詞）」をも併せた，総合的なものになっているということである。それを次の(6)に，発表者が一部手を加えた形で（(c)(d)の 2 分），紹介する。

(6) a.　1 人称・2 人称の代名詞で表される人間
　　b.　3 人称の代名詞で表される人間
　　c.　名詞で表される人間 1：特定性が高いもの
　　d.　名詞で表される人間 2：特定性が低いもの
　　e.　動物
　　f.　その他

まず，(6)の(a)と(b)の間に境界線を持つ言語としては，南米を中心に話されているグアラニ語（Guarani）がある。この言語では，1 人称・2 人称の代名詞で表される人間だけが単数形・複数形が異なる（1 人称は単数形が šé，複数形が yané や oré，2 人称は単数形が né で複数形は peé であるのに対して，3 人称は単数形・複数形いずれも haʔé）。同様に，(b)と(c)の間に境界線を持つ言語としては中国語があり，(c)と(d)の間に境界線を持つ言語としては日本語がある。たとえば「本人」や「当人」のような特定性の高い人間名詞は専ら単数の形で，複数の形「本人たち」「当人たち」とは異なる。さらに，(d)と(e)の間に境界線を持つ言語としてはティウィ語（Tiwi）がある。最後に，(d)と(e)の間に境界線を持つ言語としてはカリア語（Kharia）がある。

だが，本来的なアニマシーの尺度に，人称や名詞類の尺度をアニマシーの尺度として加えることが（経験的に支持されるとしても）なぜ正当化できるのかを，クロフトは述べていない。「暗示的なもの」が依然，「暗示的なもの」に留まっていると思える所以である。

4.　提案：「リアルさ」という概念の導入

アニマシーの高低に人称や名詞類の尺度が関係することを説明するために，「リアルさ」という概念の導入を提案したい。モノのアニマシーの高さは，そのモノのリアルさと関わっている。例として(7)を挙げる。

(7) a.　いまここに希望者が　いる/??ある。
　　b.　希望者が　いれば/あれば，あとでまとめて本部に連絡してください。
アニマシーが低いモノの存在を意味する動詞「ある」は，発話時，発話現場での現実を表す文(a)では不自然だが，仮定を表す(b)の節では自然である。これは，モノ（希望者）のアニマシーは，リアルに表現される方が高いからである。

この一事を認めさえすれば，1 人称（いま話をしている話し手）や，2 人称（話を聞いているに違いない聞き手）はリアルで，アニマシーが高くなりやすいが，3 人称（その場にいるとは限らず，実在するとも限らない話の登場人物）はあまりリアルでなく，アニマシーは高くなりにくいということは理解できるだろう。また，日本語の代名詞「彼」が基本的に，話し手が見知っている人物しか指せない（(8)は(b)のみ不自然である）ように（田窪 1989），代名詞による表現は名詞による表現よりもリアルさを必要とし，したがってアニマシーが高いということも理解できるだろう。

(8)［「その森には夜になると謎の青年が出没するらしい」と聞いて］
　　a.　青年を見た人間が本当にいるのか？　　b.??彼を見た人間が本当にいるのか？
アニマシーの階層(6)に特定性の高低という区分（(c)(d)の区別）を持ち込むという発表者の措置も同様である。特定性が高い方がリアルで，アニマシーは高い。

5.　他動性の高低に両極性と法が関与しがちという傾向の説明

アニマシーの高低だけでなく，他動性の高低にも，他動性の本来的な意味（デキゴトが「他のモノへの働きかけ」とイメージされる程度）には含まれないように思える概念がしばしば関与することが知られている。たとえば，日本語の動詞「飲む」が意味するデキゴトは，液体等のモノを経口的に体内に取り込むという，他動性が極めて高いデキゴトだが，この他動性は，このデキゴトが可能性や願望として語られる文脈では下がる。例を(9)に挙げる。

(9) a. 水 ??が/を　飲む。　　b. 水　が/を　飲める。　　c. 水　が/を　飲みたい。
飲む対象を表す名詞「水」に，他動性が高いことの現れである対格の格助詞「を」を付けることは，(a)では義務的だが，可能性が語られる(b)，願望が語られる(c)では，任意的である。つまり(a)と比べて(b)(c)は他動性が低い。

これは日本語に限った話ではない。世界の諸言語の観察に基づき，ホッパーとトンプソンは，他動性の高低を左右する 10 要因として，次の(10)の A～J を挙げている。

(10)

	HIGH	LOW
A. PARTICIPANTS	2 or more participants, A and O	1 participant
B. KINESIS	action	non-action
C. ASPECT	telic	atelic
D. PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
E. VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
F. AFFIRMATION	affirmative	negative
G. MODE	realis	irrealis
H. AGENCY	A high in potency	A low in potency
I. AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
J. INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

［Hopper and Thompson 1980, p. 252］

これらのうち，少なくとも F（両極性：成立するものとして語られるデキゴトに比べて，成立しないものとして語られるデキゴトは他動性が低い）と G（法：現実として語られるデキゴトに比べて，非現実として語られるデキゴトは他動性が低い）は，他動性の本来的な意味

には含まれるとは思えない。これらがなぜ他動性に関与するのかについて，ホッパーとトンプソンは説明を加えていないが，これはリアルさを抜きには説明できないだろう。

6. 砲撃されても壊れない夢の小屋

アニマシーや他動性の程度にリアルさが関与するということは，以上で示したように通言語的に裏付けられる。だが，我々はこれを「謎」として不思議がるべきだろう。

「掘っ立て小屋を大砲で砲撃したが，小屋はびくともしない」という夢を見た者がいるとする。なぜ小屋は壊れなかったのか？　「実は，その小屋は防御力の高い秘密基地だったから」というのは，一つの説明である。「そもそも夢とは不条理なものだから」というのも，やはり説明たり得る。だが，「その砲撃は現実のものではなく，夢に過ぎないから」というのは説明になっていない。砲撃が夢というなら，小屋も夢だからである。

「アニマシーや他動性が低いのは，当該のモノやデキゴトがリアルでないからだ。例(7b)の「希望者があれば」が自然なのは，希望者が仮定世界のモノに過ぎないからだ。また(9b, c)の「水が飲める」「水が飲みたい」が自然なのは，飲水が可能世界や願望世界のデキゴトに過ぎないからだ」という説明は，たしかに世界の諸言語によく当てはまるが，その論法は，上のおかしな説明と同じものである。なぜ，こんな説明が成り立つのか？

この「謎」を解決するには，言語をこれまでよりも場面的なものと認める必要がある。言語に脱場面的な面（Hockett 1960）と共に場面的な面があるということは，「今日」「ここ」「私」のような直示的ないし指標的な語彙の存在という形で知られているが，語彙だけでなく文法にも場面的な面を認め，アニマシーや他動性の高低は可能世界や願望世界の内部で決まるのではなく，「いま・ここ（にいる）・現実（の）・私」の視座（origo, Bühler 1934）から計測されると考える必要がある（定延 2006; 2016）。

7. 同格構造のリアルさ

単複の区別の有無から，数の一致に目を転じてみよう。一見したところ，英語とは対極的に，中国語は「数の一致を起こしてはならない」という，余剰性を排した文法を持っているように見える（例：英語(11) vs. 中国語(12)）。

(11) a. *two man　　b. two men

(12) a. 两 个 男人　　b. *两 个 男人 们
liǎng -ge nánrén　　liǎng -ge nánrén -men
two -CL man　　two -CL man -PL　「2 人の男」

だが，中国語も数の一致を徹底的に嫌うわけではない。例(13)のように，アニマシー階層上で高位を占める，人間を表す人称代名詞については，数の一致は自然である。

(13) 我/你/他 们 两 个　　cf. *女孩儿 们 两 个
wǒ/nǐ/tā -men liǎng -ge　　nǚháir -men liǎng -ge
1sg/2sg/3sg -PL two -CL　　girl -PL two -CL
「私たち/あなたたち/彼ら 2 人」　「少女たち 2 人」

念のため言えば，これは「我」「你」「他」が単数であることの（第 3 節），単純な帰結としては片づけられない。これは常識の問題ではなく言語の問題である。というのは，第一に，「我」「你」「他」についても数の一致は義務的ではないからである（例：(14)(15)(16)）。

(14) 我 两 个 没 有 介绍信，　能 不 能 登记？
wǒ liǎng -ge méi-yǒu jièshàoxìn　néng bù -néng dēngjì?
1sg two –CL NEG-have letter of reference　can NEG -can submit
「私たち 2 人には紹介状がないけど，結婚届を出せますか？」　［赵树理《登记》］

(15) 你 两 个 倒 很 投机 嘛！
nǐ liǎng -ge dào hěn tóujī ma
2sg two -CL unexpectedly very hit it off SFP
「あなたたち 2 人は案外，意気投合しているね！」 ［宗璞《东藏记》］

(16) 这 只 开 往 中国 的 船， 似乎 就 只 等候 他 两 个。
zhè -zhi kāi wǎng zhōngguó de chuán sìhu jiù zhǐ děnghòu tā liǎng -ge
this –CL go for China DE ship seem JIU only wait he two -CL
「この中国行きの船は，彼ら 2 人だけを待つらしい」 ［沈从文《阿丽思中国游记》］

第二に，数の一致の自然さは，言語構造によって異なるからである。上の(13)～(16)は同格構造の例だが，同格構造でなく修飾-被修飾構造の「两个我」「两个你」「两个他」は，多重人格等の特殊な解釈をしない限り不自然である。

このように中国語では，数の一致は修飾-被修飾構造の場合よりも同格構造の場合に生じやすいという傾向にある。これは，同格構造が特定性の高いリアルな表現構造で，アニマシーが高くなり，数の区別がなされたものと考えられるのではないか。

中国語の傾向と似たものは日本語にも観察される。新村(1954)では，日本語に数の一致は生じないことが通例とされつつ，例外が認められている（(17)を参照)。

(17) 日本語のこれら複数の表現に数詞或は数量形容詞を冠する時，複数的構成法は直ちに破れるのが常である。国々を領す—三国に跨る。人々—一群の人（時に，一群の人々） ［p. 100］

ここで例外として挙げられている「一群の人々」の「人々」は重語法による語だが，複数の接尾辞「たち」による語形成を考えてみると，談話に人間を新規導入する際，同格構造の表現は修飾-被修飾構造の表現と比べて不自然になりがちである（例：(18)）。これは同格構造が当該のモノの高い特定性，ひいては高いリアルさを必要とすることを示している。

(18) a.??或る日，村に，見知らぬ娘たち 3 人がやってきた。(下線部は同格構造)
b. 或る日，村に，見知らぬ 3 人の娘たちがやってきた。(下線部は修飾-被修飾構造)

また，「娘たち」のような普通名詞複数形は，同格構造の表現も修飾-被修飾構造の表現も自然だが（(19a, b)），よりアニマシーが高い「私たち」のような人称代名詞複数形は，同格構造の表現のみが自然で((20a)),修飾−被修飾構造の表現は不自然になりがちである((20b))。これが自然な場合が無いわけではないが，それは(21)のような，「3 人である私たち」という同格構造的な意味の場合である。

(19) a. 娘たち 3 人 b. 3 人の娘たち
(20) a. 私たち 3 人 b. ?3 人の私たち
(21) 1 人増えるごとにそれだけの追徴金をとられるなら，あなた方は 2 人だからまだいいとしても，3 人の私たちは大変なことになってしまう。

8. 修飾部と被修飾部の表現対象どうしの重なり

いま取り上げた(21)のモノ表現「3 人の私たち」では，修飾部「3 人の」と被修飾部「私たち」それぞれの表現対象どうしが，一部重なっている。こうした重なりは，モノ表現だけでなく，デキゴト表現にも観察される。たとえば「3 時間歩き続ける」は，「3 時間」に含まれるはずの最初の一瞬は「歩き続ける」わけではなくただ「歩く」だけである以上，「3 時間」と「歩き続ける」の表現対象は一部重なっている。

こうした重なりが最も明瞭に現れるのが，度数を含んだ表現である。発表者が『度数余剰』と仮称する，「算数」の数え方よりも度数が 1 つ多く表現される現象がこれにあたる。この現象には，重なり類（度数が 2 以上で成立。例：(22)）だけでなく，異なり類（度数が 3 以上

で成立。例：(23)）もある（定延 2000)。

(22)　私は既に三度，盗みを繰り返し，ことしの夏で四度目である。

［太宰治『玩具』1935］

(23)　兵を廃した国に警察予備隊ができ，これが忽ちにして保安隊と変り，三転して自衛隊となる。　［新村出『広辞苑』後記 p. 2357，東京：岩波書店，1955］

数の一致に消極的であった中国語は，「3 時間歩き続ける」に相当する表現は不自然なことがあり（「??走下去三个小时」，zǒu-xiàqù sān–ge xiǎoshí)，『度数余剰』も起こしにくい。

9. おわりに

ここでは，数の区別に関する新村(1954)の観察を出発点として，日本語を他言語と同じアニマシー階層上に位置づけるという，普遍的な文法に向けた考察を展開した。そのために必要だったのは，「アニマシーや他動性の高低にリアルさが影響する」つまり「語彙だけでなく文法にも，場面的な面がある」と認めるという，今日の我々にとっても新しい一歩である。また，数の一致に関する言語間・言語内の観察は，「修飾部と被修飾部の表現対象どうしが重なる」という現象が，言語によって程度差はあれ，モノ表現・デキゴト表現にわたって見られるという認識に行き着いた。この現象は，言語表現の構造が，仮に overlapping structure という考えを取り入れてもなお，意味と音の単純な合体物とはとらえきれないことを示している。「暗示的なもの」はまだなお尽きそうにない。

ソシュールの記号的な言語観に新村がどこまで共感したのか，発表者にははっきりわからない。が，当時の研究者は皆，この言語観に直面して，自分なりの答を出そうとしていたように見える。いま，「言語は動的な過程である」とチェイフが述べても（Chafe 2001)，記号的な言語観の限界をデユ・ボワが論じても（Du Bois 2003)，かつて時枝誠記のソシュール批判に対して起こったような議論は生じない。それぞれのサークルが，自分たち好みの言語観・文法観・問題意識・方法論の中で過ごし，外を見なくなっているのではないか。サークル間の共約可能性が失われているのではないか。

文献

Bühler, Karl. 1934/1982. “The deictic field of language and deictic words.” In Robert J. Jarvella and Wolfgang Klein (eds.), *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*, 9-30, Chichester: Wiley.

Chafe, Wallace L. 2001. “The analysis of discourse flow.” In Deborah Schiffrin, Deborah Tannen, and Heidi E. Hamilton (eds.), *The Handbook of Discourse Analysis*, 673-687, Oxford: Blackwell.

Croft, William. 1990. *Typology and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

Du Bois, John W. 2003. “Discourse and grammar.” In Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 47-87, Mahwah, NJ: Erlbaum.

Hockett, Charles F. 1960. “The origin of speech.” *Scientific American*, Vol. 203, 89–97.

Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson. 1980. “Transitivity in grammar and discourse.” *Language*, Vol. 56, 251-299.

泉井久之助　1971　「解説」『新村出全集第一巻』625-632，東京：筑摩書房.

定延利之　2000　『認知言語論』東京：大修館書店.

定延利之　2006　「資源としての現実世界」益岡隆志（編）『条件表現の対照』197-215，東京：くろしお出版.

定延利之　2016　『コミュニケーションへの言語的接近』東京：ひつじ書房.

斉木美知世・鷲尾龍一　2012　『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点』東京：開拓社.

新村出　1954　『言語学序説』［改訂版］東京：星野書店.

田窪行則　1989　「名詞句のモダリティ」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』211-233，東京：くろしお出版.